

巻頭言

創造的復興から世界をリード
する人材の育成へ

熊本県立第二高等学校長

山本 朝昭

本校のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業は、一昨年度末に文部科学省から4期目の指定を受け、2年目として事業を進めて参りました。本書は、今後の方向性を含め、本年度の事業の推進状況を中心に取りまとめています。

本校では、第4期の研究開発課題を「熊本地震の経験を課題発見につなげ、科学的視点から創造的復興をリードする人材の育成」と定め、「理数科、美術科、普通科の3学科が協働しながら探究活動を行い、熊本地震の経験を科学的に捉えるとともに社会との共創を図りながら創造的復興に向け課題を発見し、豊かな感性を持って具体的な行動に移すことのできる生徒を育成する」ことを目的としました。

熊本地震からの創造的復興は本県にとって大きな目標であり、この歩みは着実に進んでいます。大きな被害を受けた本校も、2018年2月には体育館が改修され、10月には管理棟及び図書館が新築され、新たな教育環境のもとで教育活動を展開することができるようになりました。この間、生徒たちは復旧工事に不便さを感じながらも、地域をはじめ多くの周囲の方々からの支援を受け、貴重な経験を糧に力強く教育活動に取り組んでいます。

本校では創造的復興をリードする人材の育成を目指し、次年度、熊本で開催される独立行政法人国立青少年教育振興機構等が主催する「全国中学生・高校生防災会議」の主管校として、より広範なネットワークの構築を図るなど、社会との共創に関する取組を更に進めることとしました。

また、新学習指導要領で一層発展が期待される探究活動においては、これまでの理数科「スーパーサイエンス」に加え、学校設定科目として美術科「アートサイエンス」、普通科「グローバルリサーチ」を開講して、それぞれが探究活動を推進するとともに、3学科合同でも特別授業や講演会を行いました。

特に、探究活動を進めるに当たり、授業改善の取組は本校のSSH事業の柱の一つとなるもので、全教科において探究型授業の開発に力を入れて参りました。主体的・対話的で深い学びを実現していくためには生徒の変容を妥当性・信頼性をもって示す必要があり、指導と評価を一体化することができる「二高ICEモデル」を導入し、全教科・全領域で使用できる評価法の開発を進めているところです。

技術革新や経済・社会構造の変革が進む中で、科学技術人材の育成の重要性はますます高まっていくことから、SSH事業指定校の果たすべき役割はますます大きくなります。2018年9月の「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）支援事業の今後の方向性等に関する有識者会議報告書」で指摘されたように、所期の事業成果が得られたかどうかを適切に評価していくことが、今後の取組に当たっての課題と考えています。

最後になりましたが、日ごろからご支援ご指導を賜っています文部科学省、科学技術振興機構、本校の運営指導委員、熊本県教育委員会の皆様、及び各関係諸機関の皆様にお礼を申し上げ巻頭のごあいさつとします。

